

どまらず、見られる限りの伝本をみて作品の成立過程を考察し、また本作品の位置についても狂歌史の流れの中で把握しようとしている。更に作者「越谷山人」についても、文献の上で考えるだけでなく越谷の地に何度も赴き、手を尽くして研究を深めている。それらの成果をまとめたものが山本さんのこの『狂歌百人一首泥亀の月を読む』である。

山本さんは大学では心理学を専攻され、卒業後は家庭裁判所調査官として勤め、定年を機に文学の研究をするべく同志社大学の三年に学士入学され、山田和人・神谷勝広両教授のご指導をいただいて近世文学を研究し、卒業論文には江戸末期の歌人で陶芸家としても知られる蓮月尼の研究をまとめられた。卒業後も更に古典文学の研究に志深く、非常勤で家事調停委員のお仕事を続ける傍ら大学院の講義を聴講しておられた。今から四年前、私が同志社大学大学院に非常勤講師として出講した折、山本さんも受講され、以来続けて聴講されている。私は最初の年に写本や版本になじんでいたために、架蔵の歌書類を受講生にお見せした。その中の『狂歌百人一首泥亀の月』の挿絵のある写本に、山本さんは非常に興味を持たれた。それが、この研究をするきっかけとなったようである。以来、まっすぐに、熱心に調査・研究に取り組んでこられた。本書は山本さんの、学問に掛ける情熱と、近世文学の教養を含め、持ち前の幅広い知識とが随所々にじみ出ている労作である。

平成二〇年九月

(龍谷大学文学部教授)

目次

序	大取一馬	i
はじめに	1
第一部 評釈篇	3
『狂歌百人一首泥亀の月』評釈	5
第二部 研究篇	103
第一章 研究対象とした伝本	105
一 『狂歌百人一首泥亀の月』の伝本	107
二 『闇夜磔』の伝本	113
第二章 『狂歌百人一首泥亀の月』および『戯劇百人一首闇夜磔』の成立	129
第一節 『泥亀の月』および『闇夜磔』の著者とその成立年	130
一 著者 越谷山人鱗斎一鯨	130
二 「丙子春日」と記された成立年	135
三 「泥亀の月」から『闇夜磔』への改題・改作	136

1

天智天皇 「秋の田のかりほのいほのとまをあらみわが衣手は露にぬれつつ」
 秋の野の草ふみわけてかるむしに 我衣手は露にぬれつ、

秋の野の草ふみわけてかる虫の (泥写1)

秋の野に草ふみわけてかる虫に (闇写3、4)

評釈

天智天皇の御製として百人一首の巻頭に据えられているこの本歌は、天智天皇が農民の辛苦を思いやって詠んだ歌と解釈されている。しかし、もとは素朴な伝承歌で、原歌は読人しらずの「秋田苧 借廬乎作 吾居者 衣手寒 露置尔家留(あきたかる かりほをつくり わがをれば ころもでさむく つゆぞおきにける)」「万葉集」十・二七四)であるといわれる。

もじり歌は、本歌の「衣、露、ぬれ」という下句の歌語を生かして、風雅な虫狩りの遊びに替えている。露けき野の草をかき分けかき分けて虫狩りをする子等の衣は袖だけでなく裾も、また髪までも露で濡れている。歌に添えられた戯画は可憐に咲く野の花々である。闇版だけは親子が手をつないで野を闊歩している戯画である。虫も鳴く音を止めてしまいう程に威勢が良く、滑稽である。

2

持統天皇 「春すぎて夏きにけらし白妙のころもほすてふあまのかぐ山」

春の雨はれてのどけき空色の 衣ほすてふあまのかぐ山

評釈

万葉集第二期を代表する女流歌人である持統天皇は、天智天皇の第二皇女で、天武天皇の皇后となった。天武天皇が崩御後即位し、大和国藤原宮に遷都した。この藤原宮は古来大和三山として有名な天の香具山、畝傍山、耳成山に囲まれた地である。『万葉集』の原歌「春過而 夏来良之 白妙能 衣乾有 天之香来山(はるすぎて なつきたるらし しろたへの ころもほしたり あめのかぐやま)」「一・二

八)とは少し字句が異なるが、衣更えの季節を迎えて詠うこの歌は、いずれも青葉と白い夏衣が鮮やかで、色のコントラストが美しい絵画的な歌である。ただし、歌枕にもなっているこの香具山は、天皇の統治を象徴する「国見」をする山として詠まれ、「神の」と冠し、神々の世にまで遡る歴史を意識させる山である。また、伝承も多い。それ故、『新古今和歌集』の夏の巻頭歌に据えられたこの本歌は、第四句の「衣ほすてふ」としていることから、実景に伝承を重ねた解釈もされている。

もじり歌は季節を春に替えて、雨が降り止み、晴れ上がった春の青空に衣を干していると詠う。その衣は、掛詞として空色の衣であるとするならば青空に吸いこまれるような青さだろうか。或いは下敷きになっている本歌と同じ白い衣であれば天女の羽衣のような白妙の衣だろうか。否、狂歌の評釈としては、菜種梅雨が降り止んでの晴れ間、何段もの物干し竿に信号旗ならぬおしめが満艦飾に翻っているのかもしれない。天の香具山もやがて万緑の季節を迎えるだろう。

3

柿本人麿 「あし曳の山どりのをのしだりをながくしよをひとりかもねん」

みせもはやひけ四つ過の傾城は ながくしよをひとりかもねん

評釈

万葉集第二期を代表する柿本人麿は、持統、文武両朝に仕えた宮廷歌人である。三十六歌仙の一人であり、大伴家持には次の四番歌の山辺赤人とともに「山柿の門」と称され、また、紀貫之には「歌聖」とまで崇められている。ただし、この本歌の原歌は、『万葉集』(十一・二八〇二)に作者未詳の歌として「念友 念毛金津 足檜之 山鳥尾之 永此夜乎(おもへども おもひもかねつ あしひきの やまどりのをの ながきこのよを)」とあり、その左注に「或本歌云」として、この本歌「足日本乃 山鳥之尾乃 四垂尾乃 長永夜乎 一鴨將宿」が異伝として載っている。それが平安時代になると『人丸集』

第四部 影印篇……………233

凡例 235

『狂歌百人一首泥亀の月』【東京都立中央図書館特別文庫室蔵】影印……………236

『戯劇百人一首闇夜磔』【東京都立中央図書館特別文庫室蔵】影印……………236

初句索引……………294

あとがき……………296

はじめに

雅の文学といわれる和歌に対して、諧謔・滑稽を詠んだ卑俗な和歌、いわゆる俗の文学と言われた狂歌は、万葉集の戯笑歌、古今和歌集の俳諧歌の系統をうけつぐもので、鎌倉・室町時代にも和歌、連歌の余技として行われ、さらに近世前期では上方中心に俳人の松永貞徳、半井卜養、石田未得らが狂歌を詠んでいた。しかし、文運東漸といわれる近世文芸の上方から江戸へへの中心の移動後、狂歌も百年あまりの間に爆発的に流行した。当初は知識層だけの仲間内の趣味的、遊戯的なものでしかなかった。それが次第にその枠が取り払われ、出版界の隆盛と相まって作品の商品化、作者の職業化が進み、大衆化とともに低俗に落ち、近世末期には早くも衰退に向かい、以後目立った興隆はない。

一方、元禄頃から俳諧の一分野として流行した川柳は、明治にかけて一旦は近代文学の発展の陰で低迷するが、いまでは広く愛好され、企業が宣伝のために募集すると数千通の応募があるなど人気を博している。狂歌も川柳も同じように人情や風俗を滑稽に詠い、機智に富み、風刺の効いたうがちに魅了されるものであるのに、狂歌の流行は一時のものでしかなかった。その違いは、単に十七文字と三十一文字という字数の違いだけではなく、それぞれの本質による違いがありそうである。川柳は俳諧の前句付から独立したもので、発句とは違って、切れ字・季節などの制約がない、簡潔な短詩である。しかし、狂歌は知的遊戯の世界ともいわれるほど、内容の可笑しさだけでなく、和歌に精通し、その和歌の一部を取り込んだ本歌取りや掛詞・縁語、比喩、見立てなどの伝統的技巧を駆使して作り、読者もまた覗きからくりを見るようにうがちや茶化しを見抜くことで面白さが増大する仕組みとなっている。

1 はじめに
『狂歌百人一首泥亀の月』とその改題、改作された『狂歌百人一首闇夜磔』・『戯劇百人一首闇夜磔』は、『小倉百

第二節 版本『闇夜磔』の序者並びに画工兼版元と著者の関係 140

- 一 序者の四方瀧水 140
- 二 画工の眉山竹孫兼版元の竹内孫八 142
- 三 四方瀧水および竹内孫八と著者の関係 143

第三章 江戸狂歌史における作品の位置……………147

第二節 江戸狂歌の展開 148

- 一 明和期 148
- 二 安永期 148
- 三 天明期 149
- 四 寛政・享和期 163
- 五 文化・文政期 164

第二節 『泥亀の月』および『闇夜磔』両作品の位置 175

第三節 その他のもじり百人一首における両作品の位置 179

第四章 両作品の特徴……………183

第一節 狂歌の特徴 183

- 一 多様な技巧による狂趣 183
 - 1 本歌取りの面白さ 184
 - 2 掛詞、縁語、またその複合の面白さ 185
 - 3 見立ての面白さ 186
- 4 対比の面白さ 187
- 二 多様な主題による狂趣 188
 - 1 庶民の生活や風俗を詠んだもの 188
 - 2 恋人、夫婦、親子などの心の機微を詠んだもの 192
 - 3 傾城や遊廓を詠んだもの 194
 - 4 四季の景物を詠んだもの 195
 - 5 生き物の世界への情を詠んだもの 196
 - 6 その他、人生にまつわる述懐を詠んだもの 197

第二節 戯画の特徴 198

- 一 写本の彩色戯画 198
- 二 版本の墨色戯画 202

第三部 翻刻篇……………203

凡例 205

- 一 『狂歌百人一首泥亀の月』【東京都立中央図書館特別文庫室蔵】翻刻……………206
- 二 『戯劇百人一首闇夜磔』【東京都立中央図書館特別文庫室蔵】翻刻……………217
- 三 『狂歌百人一首闇夜磔』序・跋の翻刻……………230
 - 1 『狂歌百人一首闇夜磔』【東洋大学図書館蔵（ア）本】序の翻刻……………230
 - 2 『狂歌百人一首闇夜磔』完【西尾市岩瀬文庫蔵】序・跋の翻刻……………231